

# 令和3年度 学校評価 学校関係者評価書

三木市立緑が丘東小学校

## 1 学校教育目標

心豊かに たくましく 未来をひらく子の育成 「信じようじぶんを 認め合おうともに」 「自ら学ぶ 学びの楽しさあふれる学校」
---

## 2 本年度の重点目標

(1) 命の尊さを実感し、自他を認め、豊かなかわりができる子どもの育成が全教育活動の根幹であることを全教職員が共通理解し、組織的な教育活動を展開する。
(2) 一人一人の考えが生かされ、共に学びを高める授業の創造を目指して、「仲間づくりを意識した授業づくり」を柱とする授業研究に取り組み、子どもたちに学びに向かう基本的な姿勢を養う。
(3) 保護者・地域と連携することで教育効果を高め、保護者・地域の願いに応える信頼される学校をつくる。

## 3 自己評価結果 (達成状況) 【 A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成されていない D：達成していない 】

評価の観点	評価項目	評価	取組 (達成) の状況	改善の方策
道徳・人権教育	① 「特別の教科 道徳」を要とし、「兵庫県道徳教育副読本」や「三木市指定教材」などを効果的に活用した授業づくりを推進し、学校教育活動全体を通じた道徳教育、人権教育を進め、その実践力を育成する。 ② 体験活動、交流活動や異年齢集団を活用するなどし、豊かな人権感覚、社会性や人間性を育成する。 ③ 新型コロナウイルスに関する偏見や差別を許さず、医療従事者等への敬意や感謝の念を持つことのできる態度を養う。	B	① 授業研究や校内研修、フィールドワークを行い、授業力向上に努めた。ハートフル人権学習では全職員で教材研究を行い、学年通信等で保護者と連携を図りながら進めた。 ② 東っ子タイムやスポーツフェスティバルの東っ子競技は、6年生を中心に計画・準備し望ましい活動ができている。 ③ 「あらたなやくそく」について全職員で絶えず共通理解を図り、偏見・差別につながる雰囲気生まれないように日々の教育活動に取り組んだ。	① 人権教育のさらなる充実に向けて、教職員の研修を継続する。道徳教育については、実践力の育成を意識しカリキュラムの定期的な見直しと授業改善に努める。 ② 体験活動や交流活動、異学年交流について、感染症対策を行いながら、可能な限り活動の幅を広げていく。 ③ 教職員自身がアンテナを高く持ち、折に触れて児童に話をしていく。これまでの指導で育っている児童の気持ちや温かい風土をこれからも大切にして、指導していく。
学習指導	① 学習規律、学習習慣を確立し、学習意欲の向上を図り、基礎的基本的な知識・技能を習得させる。 ② 生きて働く思考力・判断力・表現力を培い、主体的、対話的で深い学びを通じて、学びに向かう力を養う。 ③ 「認め合い、共に学ぶ協同的な学び」「一人一人の思考が広がり、深まる学び」を研究・実践するなど、常に授業改善に努める。 ④ ICTの活用、プログラミング教育などの情報教育を推進し、情報活用能力を高める。	B	① 「学習がんばりカード」「朝学習タイム」のねらいに対する共通理解を図り、継続的に取り組み、自分も友だちも大切に学習規律の定着を図った。 ② 思考を深める学習課題の工夫を中心に、学習者が多様な意見を出し合い学びを深める授業づくりに努めた。 ③ 研究テーマに基づいた研究授業・授業交流・研修を通して「仲間づくりを意識した授業づくり」を行った。多様な意見を認め合い、共に学ぼうとする関わりが増えた。 ④ 一人一台のタブレット活用について共通理解や研修を行い、ICTの活用を意識して学習に取り組んだ。	① 効果的な活用方法や学習意欲の向上にむけて、系統性や内容のふり返りを行い学習者が自ら実践できるよう指導を継続する。UDの視点を取り入れた学習に努める。 ② 学習内容をもとに表現し、生活と関連付け活用や実践力を育む学習の設定を意識し、学年団中心に取り組む。 ③ 引き続き「協同的な学び」「思考を深める授業づくり」を実践する。特に学習課題・発問・ふり返りの一貫性を図り学習者が主体的に学ぶための手立てを明確にする。 ④ ICT活用の意義や学習への効果を見極めるための研修を通して、教職員の指導力を高める。
生徒指導	① 児童の内面的な理解に基づく年間指導計画を作成し、組織的な生徒指導に取り組む。 ② 児童のおもいに寄り添いながら内面的な理解を深め、いじめや不登校の未然防止・早期発見・早期解決を図る。 ③ SC (スクールカウンセラー) や、学校生活支援教員等による教育相談体制を確立する。 ④ 一人一人のよさが認められ、話し合い、合意形成が図られ、意思決定がなされる学級経営を目指す。	B	① 年間指導計画を軸に、情報を共有し、組織的に共通した生徒指導を行えるよう取り組んだ。 ② 児童への生活アンケートや聞き取りをもとに、全職員で共通理解を図り、いじめや不登校などの未然防止・早期発見に努めた。 ③ 児童の様子について、SCや学校生活支援教員と情報を共有し、児童の内面理解に努めた。SCが児童にとって身近な存在になり、保護者にも適切につなぐことができた。 ④ 正しいふるまいや行動を主体的に考え、実践できるよう、話し合いを大切に学級づくりを進めた。	① 常に情報を共有し、全職員で全児童を見守り、組織的な指導を行う。 ② 子どもとの対話を通して、児童一人一人の内面理解に努め、事案が起こった際には、迅速で丁寧な初期対応、課題の解決に向けた方策を図る。 ③ 教職員とSC、学校生活支援教員等が連携し、よりよい教育相談体制づくりを進める。 ④ 一人一人を大切に、主体的に判断し行動できる児童の育成を目指し、共通理解や研修を引き続き行う。
特別支援教育	① 特別な支援を必要とする児童の実態を早期に把握し、組織的な支援体制を充実させる。 ② 切れ目のない一貫した支援を行うため、異校種間や関係機関と連携する。 ③ 交流および共同学習の場を充実させるなど、インクルーシブ教育の視点に立った支援を行う。 ④ 本人、保護者との共通理解のもと、一人一人の教育的ニーズに応じた支援や合理的配慮を行う。	B	① 毎月の支援委員会で、児童のかかえる課題を共通理解し、支援の方法について確認することができた。 ② 中学校、特別支援学校とは、進路に向けて連携がとれている。また、医療機関と連携することで、医療の立場からの所見をふまえて支援ができた。 ③ 言葉や板書にUD (ユニバーサルデザイン) の視点を取り入れて授業づくりの工夫を行った。その結果、誰もが安心して過ごせる体制づくりができてきている。 ④ 校外学習等の行事や日々の学習について、本人・保護者と話し合いを行い、個に応じた配慮や支援を行った。	① 今後も職員全体で子どもを観るという意識を持ち、子どもたちの小さな変化に気づけるような目を養う。 ② 医療機関との連携は今後も大切にしていく。異校種 (のじぎく特別支援学校、地域の高校など) との共同研修の場を設け、深い知見や専門性の向上を図る。 ③ 引き続き、UDの視点を取り入れた授業づくりの工夫を行い、職員相互に交流し合う。 ④ 行事等は、計画段階から誰もが安心して参加できるよう立案する。また、個々の力の積み重ねを大切にしていくなために、学習面でも個に応じた内容などの調整を図る。
安全・防災教育	① 命の大切さを知り、危険を予測し、判断し、主体的に行動できる力を育成する。 ② 災害発生時に、身を守る行動がとれるよう、家庭、地域、消防や警察などと連携し、防災訓練等を通じて、実践的な防災、防犯教育を実施する。 ③ 定期的な学校施設の安全点検や登下校指導を継続し、安全な環境づくりを進める。	B	① 朝会及び日々の学習等で新型コロナへの対応を含め、「命」の大切さや「感謝」の気持ちについて指導するとともに、自分も周りの人も大切な存在であることを再確認した。 ② 学期ごとに避難訓練 (火災、不審者、地震) を実施し、道徳学習 (阪神淡路大震災・東日本大震災等) や社会科学習で三木市や地域のハザードマップを使用するなど災害や災害への備えについて考えることができた。 ③ 毎月、校内安全点検を実施し、児童の安全・安心な環境づくりに努めた。交通安全教室や登校・下校指導及び公園等のパトロールを実施し児童の安全確保に努めた。	① 人権教育を大切にしながら教職員及び児童が危機管理意識を高めるとともに、多様な場面で自己の命を守るための行動がとれるよう指導を継続する。 ② 教職員の防災・防犯研修を充実させるとともに、家庭・地域・関係機関 (消防署・警察署) と連携を図り、実践的な避難訓練・防犯訓練を実施する。 ③ 毎月の安全点検を継続し、必要とする修繕や修理箇所について改善するなど児童の安全・安心な学校環境をつくる。交通安全教室や登校指導・下校指導及び公園・周辺の施設のパトロールを行い、児童の安全確保に努める。
保護者・地域異校種との連携	① オープンスクールや積極的な情報発信による開かれた学校づくりを推進する。 ② 保護者や地域の支援、指導力を教育活動に適切に取り入れ、保護者や地域とつながる教育活動を推進する。 ③ ふるさと学習を推進するため、各学年における主題の在り方を研究し、系統性のあるカリキュラムを作成する。 ④ 「めざす子どもの姿」を共有し、就学前教育、中学校教育との円滑な接続に向けて、交流を推進する。	B	① オープンスクール、学級懇談会、HP、動画配信を工夫するなど、情報発信に努めた。 ② 各学年の学習活動への保護者の参加や老人会の方との花植えなど、保護者や地域とつながる教育活動を推進した。 ③ 社会科や生活科、総合的な学習の中で、学年に応じて、ふるさと三木について学ぶ機会がもてるよう努めた。 ④ 保幼こ小連絡会、秋フェスタ、緑が丘中学校区6年生の交流を行うなど、就学前教育、中学校教育への円滑な接続に向けて取り組んだ。	① 「あらたなやくそく」のもと感染防止に工夫し、地域や保護者につながる機会を設けるなど、今後も積極的に情報発信に努める。 ② 「あらたなやくそく」のもと、感染防止に努めつつ、地域の指導力を取り入れる等、今後も地域との連携を深める。 ③ 社会科や生活科、総合的な学習の中で、ふるさと三木を意識した学習活動が系統的に取り組めるよう、カリキュラムを作成する。 ④ 異校種交流を引き続き行い、教職員同士の情報交流を図り、「めざす子どもの姿」の共有をしていく。

## 4 自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

評価は概ね妥当である。  コロナ禍の中で、学校関係者が学校を訪問する機会がほとんどなかったが、評価するための資料は充実しており、資料からも人権教育を基盤に据えた教育活動の評価が適切になされている。
--

## 5 評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについて  評価は概ね妥当である。  コロナ禍の中での人権感覚の育成をぶれることなく継続されている。今後も、児童や保護者の高い評価に満足されるのではなく、実践力を培う授業づくりを継続されたい。
評価は概ね妥当である。  「学習がんばりカード」や「朝学習タイム」などの様々な手立てを今後も継続し、生きてはたらく学力を培っていただきたい。また、個別に対応する時間も確保して、学力の向上に努めていただきたい。
評価は概ね妥当である。  教師のきめ細かな指導により、ほとんどの児童が楽しい学校生活を送れていることは評価できる。しかし、困ったときに先生や友だちに相談できていないと答えた児童が10人に1人いるということに目を向け、より一層一人一人を大切に指導を進めていただきたい。
評価は概ね妥当である。  一人一人の児童がかかえる課題を共通理解することや子どもたちの小さな変化にも気づけるような目を養うことは、全教育活動の原点である。今後も継続されたい。
評価は概ね妥当である。  コロナ禍の中での人権感覚と、安全教育での命の大切さは、切り離せないものだと考える。「自分の命は自分で守る」という意識を引き続き育てていただきたい。また、常に子どもたちの立場に立った安全面での配慮をお願いしたい。
評価は概ね妥当である。  学校と家庭とのつながりを地域へ、地域とのつながりを家庭へという両方向からのつながりが、異校種との連携へとつながっていきとえられる。コロナ禍が収束した後は、老人クラブ、自治会等との連携が活発に再開されることを期待したい。